

転生赤ちゃんカティは諜報活動しています
そして鬼畜な父に溺愛されているようです3



ミルカ・ラフォン

優しく頼りになる魔術医。
カティの秘密を知っている。

レオ・グランデ

エドヴァルドの侍従。
ミンミもカティも大好き。

クロヴィス・レニエ

ユリ公爵家騎士団の団長。
カティに物凄く過保護、
かつ信仰心を抱いている。

ヴィクトル

ローベンス王国の第三王子。
カティのことが大好き。

カティ・ユリ

前世の記憶を取り戻した
公爵家の幼女。
チート魔法で人生楽勝！
のはずだったんだけど……

エドヴァルド・ユリ

王国の冷酷無慈悲な宰相にして、
カティの義父。
カティを大切に護っているが、
今回大ピンチに!?

幻惑兔

カティが出会った可愛い兔。
しかし恐ろしい秘密がある。

登場人物紹介

プロローグ

「せっかく全部覚えたのに。ホント許せないわ、あの中二病ども！」
カティは呪詛を吐きながら、お怒りモードで机上を見つめた。
ここは、宰相執務室。カティの特等席であるゴロゴロ用の大きなソファート、低くて広い応接机が設置されている。カティはその広い机の上に座り込み、広げられた最新の貴族年鑑や王宮使用人名簿などと格闘していた。

……というのも、先日、混沌と厄災をもたらす魔神をこの世に呼び覚ますために、このローベンス王国の王子ヴィクトルが、生贄として攫われる事件があった。

カティも魔鳥に攫われたが危機一髪のところまで生還し、事件も無事解決したのだが、結果として王宮内に多くの邪教徒が入り込んでいたことが明らかになった。

それどころか、黒幕が三名の王子たちの家庭教師を長年務めていた人物だったのだ。

この事件は世間に大きな衝撃を与え、王宮関係者の隅々まで身元確認が行われることになった。

同時に、事件に関わった貴族家の当主交代や家族構成の変化、要人の配置転換、そして王宮の使用人の大幅な人員整理や新たな雇用のために大幅に人が入れ替わった。

そのため貴族年鑑や使用人名簿を刷新し、順次更新されていく。

つまり、カティはせっかく覚えたものを、また一から覚え直さなければならなくなったのだ。

おまけに、レオから貴族年鑑の肖像画には落書き禁止！と強く釘を刺されている。

以前、高価な貴族年鑑に落書きをして、失礼に当たると注意された過去がある。しかしその後、何度も貴族年鑑を開いてレオが楽しんでいたのを見逃してはいない。

（覚えていない方が失礼になると思うの。落書きとはただの落書きにあらず！記憶するための暗記術なんだから）

例えば、羊の放牧や紡績業を主要事業にしている伯爵には、二本の巻いた角を付け足し、『触ってごらんウールでしょ』と吹き出しを書く。

「どう様もレオも、教科書に落書きをしたことがないなんて可哀そうに。きつと堅苦しいって周りから浮いて、寂しい学生生活だったに違いはないわ」

そもそもエドヴァルドもレオも優秀で、もちろん周囲にもこのようなくらいのことをする者はいないが、カティは勝手に憐れむ。

「あ、だから情緒が育たないまま大人になっちゃったのね。ここはひとつ、私が楽しい勉強の仕方を教えてあげなくちゃ。昔、教科書の顔写真を片っ端からアレンジして、教科書マスターと呼ばれたこのカティ様が！」

カティは、邪教徒たちへの怒りをしばし忘れ、落書きに没頭した。

前世の記憶があるカティだが、特段すごいことができるわけではない。

ただ、前世の社会システムや考え方は、この世界にとっては有益な情報であるらしい。

思い出した時はエドヴァルドに話すようになった。

エドヴァルドはユリ公爵家の当主であり、ローベンス王国の若き宰相だ。そしてカティの義父でもある。

冷静沈着で辣腕を振るう彼は、カティから聞き出した情報を生かしてこの国の治安や教育に役立てている。もちろんカティに対しても最初は恐ろしいほどの鬼畜ぶりを発揮していたが、最近徐徐に鬼畜から人間に進化しつつあるとはカティの談。

今では信頼し合い、親子として固い絆で結ばれている（であろう）二人だが、血のつながりはない。

カティはエドヴァルドの弟のクラウスの子であるが、エドヴァルドとクラウスはその両親の再婚によって兄弟の縁を結んだからである。

そのカティの実の父クラウスは、妻であるユリアーナに殺害されてしまった。

カティも、実母であるユリアーナに殺されかけ——前世の記憶を取り戻したのだ。

エドヴァルドの力になりたいと頑張つて、時には潜入捜査、時には寝たふりで情報収集するなど、カティは赤ちゃんパワーを大いに発揮しているんな事件解決に携わってきた。

街中でたまたま行き合った小物のスリを小剣投げで仕留めるくらいは朝飯前になるほど腕を上げていたが、いくら頑張つてもなかなか身につかないものがあつた。

それは魔法である。膨大な魔力を身に宿しながらも、それをうまくコントロールできず、魔力が

体内を暴走して体調を崩すこともあった。

庭で拾った枝を魔法の杖代わりにすることで、光魔法を使えるようになったものの、それは懐中電灯やポインターにしかならない光が出るだけのしょぼい魔法に過ぎなかった。

しかし、実はそれは治癒魔法というとても稀少な魔法だった。といってもその程度は低く、疲労を取ったり、痛みを軽くしたりする程度のつましやかな力しかない。そのため、激務のエドヴァルドの専属の癒し係になっていたが、件の魔神事件の際には驚くほどの魔法が発現した。

ヴィクトル王子の命が生贄として捧げられる正にその瞬間。

ここで失敗すればヴィクトルともども命がないという絶体絶命の場面で、カティはレーザー砲と名付けた光魔法を放って教会の屋根を吹っ飛ばしたのだ。

しかしこのレーザー砲はその時一度限りで、その後は一度も出すことができていない。

「どうしてあの時だけ、あんなすごい魔法が使えたのかな」

事件後、以前と同じポインターとレーザービームしか放てず、ヴィクトルの火傷を治した治癒魔法も再びほんわかとした癒し魔法に落ち着いていた。

「だから、こんなことよりも早く魔法の練習がしたいのに」

心身の休養といいながら、名簿を覚えろと言うエドヴァルドはやはり鬼畜である。

「うう、もう指も脳も限界」

落書きをし終えたカティは、筆記具を置いてソファーに寝転がった。カティの小さい手では筆記具を使うというものもなかなかの重労働なのだ。

「わあ、いい天気」

執務室の窓から見える空は澄んだ青色で、大きな白い鳥が優雅に羽ばたいて空を横切っていた。「ああ、逃げたい。鳥みたいに飛べたら窓から脱出できるのに」

（あれ？　そういえば空を飛んでいる人を見たことがないけど、そんな魔法はないのかな）

前世では、ほうきにまたがって飛ぶのはセオリーだった。

「ミルカ先生に聞かなくっちゃ！」

ほうきで空を飛ぶとか、あわよくば、憧れの忍法・大風乗りが叶うかもしれない。

そう思うとテンションがどんどん上がってきた。空を飛ぶことができれば侵入や逃走が容易になり、これまで以上に諜報活動がはかどる。こっそり屋敷を抜け出せば夜な夜な悪者退治もできる。

カティはすくつとソファーの上に立った。

「ある時は深窓の公爵令嬢！　ある時はかげろうお銀、そしてまたある時はカティ口探検隊長！　果たしてその実態は——平和を愛する正義の味方、月光カティ！」

重厚な執務室にカティの声は吸い込まれていく。

部屋の主と同様に冷たい空気がカティを刺した。

「……ま、まあ、月光カティよりカッティヌの星の方が良かったかもしれないし」

気恥しくなったカティは、いそいそとソファーから降りようとする。

そこで扉の隙間に気が付いた。

「あ！　レオ！」



カティの休息にと、飲み物と軽食が乗ったワゴンを押してきたレオが、部屋の入口で気まずそうに立っていたのだ。

「……こほん。何も見ておりませんので」

ワゴンを押して入ってくるレオにカティは顔を真っ赤にした。

「そんなわけないでしょ！ 乙女の秘密を口外したら駄目だからね！」

「わかっております」

「やっぱり見てたんじゃない！」

カティは、ようやく戻ってきた騒がしくも平和な日々を楽しんでいた。

しかし、カティのいるところ事件あり。

この平和な時間はそう長くは続かないのであった。



王宮へ再び通うことになったカティは、王宮内の宰相執務室のソファアの上で、ニマニマと顔をほころばせながらやすやすと眠っていた。

ソファアの前の大きな机には筆記用具や書類や洋紙が広げられている。先ほどまで作業をした形跡は見られるものの、その当人は夢の中にいた。

「カッティヌがいる限りこの世に悪は栄えない！」

赤くお洒落なマスクで素顔を隠した少女が悪人の屍——意識を失ってるだけだが——の山の上に立ち、そう高らかに宣言する。

「正義のヒーローが来てくれた！」

「カッティヌ、ありがとう！」

「なんて可愛いのに！」

民からかけられる声に手を挙げて応え、すっと姿を消す正体不明の正義の味方。

「ほほほ。盗賊退治なんてお茶の子さいさいよ！」

人前から走り去ると、暗がりですこそこそとマントを脱いで人々に紛れる、なんとも庶民的な正義の味方。

夜な夜な魔法の杖を片手に街へ繰り出しては、悪党どもをバツバツと倒す。

杖の先からは電撃が放たれ、炎が舞う。

時には光魔法で目つぶし、突風で敵を吹き飛ばして戦闘不能にする無敵の魔法使いカッティヌ。

そんなある日、賊が王宮に侵入し、国王の命が狙われた。その場に居合わせたカティは正体がばれるのも構わずに杖を構え、一撃で賊たちを戦闘不能にする。

「まさかカティちゃんが巷で噂の大魔術師カッティヌの星だったのか！　ありがとう、助かった！　昔から可愛いだけじゃないと思ってたぞ！」

国王は興奮して、賊から命を守ってくれたカティを褒め倒し、ぎゅっと抱きしめた。

「ぐえっ」

力いっぱい抱きしめながら、おひげをすりすりこすりつけてくる二重に迷惑な国王を腕で押し返そうとしたが、さらにぐいぐいと国王は締めつけてきた。

「ちよっ！　おうさまー！」

『パキッ』

小さくしかしはつきりと音がした。いやな予感がする。

カティは恐る恐る懐に入れていた杖を取り出した。

カティと国王にはさまれた杖は無残にもぼきりと折れていた。

「うそっ！」

カティは、自分のあげた大声で目を覚ました。

ソファーから半分身体がずり落ちている。

あまりにもリアルな夢に全身から冷や汗が流れ、心臓がドッドツと暴れている。

「あぶな……かった」

手の平で汗を拭って顔を上げると、冷ややかな視線のエドヴァルドと目が合った。

「うっ」

本当はちょうど、先日の事件の詳細を報告書にしているところだった。

公の事情聴取の記録にカティの証言を載せることはできないが、その目で見聞きしたことは貴重な情報であるからと、非公式に保存されることになり、報告書を作成することになったのだ。

魔鳥の足に掴まれて大空に舞い上がったこと、いけ好かないおっさん（黒幕）に抱っこされた屈辱と嫌悪。ヴィクトルと涙の再開、そして二人の鬼気迫る逃避行。

それらをカリカリと真面目に、そして時には挿絵や四コマ漫画にて臨場感あふれる一大スペクタクルな報告書を作成していたが、いつの間にか夢の中へと旅立っていたらしい。

じーっとエドヴァルドに見つめられて、カティが冷や汗をかく。

視線をずらすとレオが濡れタオルをカティに差し出した。

「大丈夫ですか？ 怖い夢でも見ました？」

「う、うん！ 悪者退治をしていたら、陛下に杖を折られてしまったの」

タオルを受け取ると、喫茶店で休憩中のサラリーマンばりに顔と首筋の汗を拭く。

それから悪夢ではない夢を思い出した。

……あの国王ならあり得る。

ただの庭で拾った枝切れだが、カティにとっては大事な杖だ。

魔法の発現のきっかけとなり、カティにはなくてはならない必需品なのだ。

（正夢になりそうな予感がする、しばらく陛下には近寄らないようにしよう）

「少し休憩にいたしましょうか」

気遣いの塊のレオがお茶の用意をしに行く。

カティがあたりを見渡すと、エドヴァルドはまだカティを見つめていた。

怒られるだろうか、と身をすくませると、ぽんと頭を撫でられる。

「お前はまだまだ寝て遊ぶことが仕事なのに、苦勞ばかりかけてすまぬ」

「え!？」

（どう様が私をねぎらう……ですって？ これは天変地異の前触れか、めちゃくちゃ怒られる前振りかも……）

カティは身構えたが、エドヴァルドはさらにカティに謝った。

「お前を守り切れなかった私の不徳の致すところだ、不甲斐ない親ですまない」

少し目を伏せたエドヴァルドの愁いを帯びた表情に、カティの胸がつきんと痛んだ。

「どう様……どう様は不甲斐なくなかない！ 世界で一番頼りになるんだから！ 私こんなの得意だし、全然嫌じゃないもの！」

その言葉に、エドヴァルドの口角が少し上がる。

鼻息荒く熱く語るカティは、それに気が付かない。

ちょうどミルクを持ってきたレオは、少しかわいそうな子を見るような目でカティを見ながらほとんどコップを置く。その隣のお皿には、いつもよりちょっと多めにお菓子が置いてあった。

「この穴に隠れるところと魔鳥の罠にかけるところは山場だから……」

エネルギーもやる気もアップしたカティは、報告書の続きに取り組み、自信満々で提出した。

報告書を手にしたエドヴァルドはパラパラと読み飛ばすと、無言でレオに渡した。レオもパラパラと目を通すとやはり黙ってエドヴァルドに返し、エドヴァルドはそっと引き出しの中に入れた。

「レオ、すまないが時間のある時に尋問……いや、聞き取りで作成してくれ」

「かしこまりました」

レオが生真面目な顔で頭を下げる。

「どういうこと!? めちゃくちゃわかりやすく書いたのに!」

カティの抗議は二人には流され、レオの丁寧な聞き取りにより、形式が整った報告書が作成された。

こうして報告書の件が片付くと、カティは降って湧いたお休みを堪能することになった。

アスラン王国から国王と王女たちが視察に来ることになり、エドヴァルドがその準備に忙しくなったからだ。

おかげで、宰相執務室でゴロゴロしたり、ヴィクトルの部屋に入り浸ったり。

まさに三食昼寝付き。今もレオが用意していつてくれたミルクをコクコク飲みながらお菓子をつまむという、令嬢というには恐ろしくだらけた姿をさらしている。

「ふはあ。極楽極楽」

露天風呂で寿命がのびたおばあちゃんのような感想を漏らしながら、至福のひと時を味わう。

「これであと漫画があれば」

この世界には絵本はあるが漫画はない。

エンターテイメント自体が少なく、その概念すら薄い。だからといって観劇や音楽などの発展ぶりから見て、需要がないとは思えない。

「あ！自分で描けばいいんじゃない？ 作品は……『魔神を倒して国を救う奇跡の天才ベビー爆誕!』。それで百万部突破で印税がっばりとか」

妄想でウハウハしながら、モグモグごつくんしていると、ノックとともに扉が開いた。

エドヴァルドが帰ってくるにはまだ早い。おまけに扉の前には護衛がいるはずで、エドヴァルドは誰も入れないように命じているはず。

とすれば、ヴィクトルかエドヴァルドの部下だろう。

そう予想してカティが扉の方を見ると、国王がニコニコして立っていた。

（うわ！陛下！会いたくなかった!）

「おうたま？」

顔をしかめそうになるのをなんとか抑えて、プライスレスの笑顔を浮かべる。

国王の後ろにエドヴァルドがいるのかと目をやるも、そこにいるのは国王の侍従と護衛だけだった。

「よしよし、まだエドヴァルドの奴は戻ってきておらん」

護衛を扉の側に控えさせ、やってきた国王はカティをいきなり抱きあげる。

（ちよっと、ちよっと!）

悪夢とおんなじシチュエーションに焦り、カティは短い腕を精一杯突っ張って、国王との距離を

最低限キープする。

「今日はこれまた珍しい菓子が手に入ってたな。カティちゃんに持ってきた」

（あら。珍しいお菓子ですと？ まあ、それなら話は別ですわ、偉大なる国王陛下！）

カティは心からの笑みを浮かべ、きゃっきゃっと国王を歓迎した。

「最近エドヴァルドが忙しいからな。寂しいのじゃないかと思ってな」

その言葉にカティは一瞬首を傾げる。国賓を迎えるのであれば、宰相のエドヴァルドのみならず国王自身も忙しいはずなのに、エドヴァルドのいない隙を狙ってきたようなことを言う。

しかしその疑問は、国王の合図により、侍従が差し出した箱で消え去った。

（こ、これは！ 見たらし団子をみたらしい……なんて言ってる場合じゃないわ！）

目の前に差し出されたのは白い小さな団子。とりとりとした艶やかな茶色いたれがたつぷりとかかったみたらし団子にしか見えなかった。

「異国の商人からの献上品でな、特別な粉を使って作るそうだ」

国王が小さく切ってフォークに刺し、カティの口元に差し出してくれた。

カティは期待に胸をドキドキさせ、ごくりと喉を鳴らし、震えながら、団子をぱくりと食べた。

口の中に広がる甘じょっぱさと懐かしく香ばしい香り。紛うことなきみたらし団子。

「おうたま……だいき」

カティは懐かしさの洪水に溺れて涙腺が崩壊しそうだった。

「そうかそうか、わしがそんなに好きか。で、時にカティちゃん」

国王がコホンと一つ咳をする。そして誰もいないのに左右を見渡してから声を潜める。

「なあ、カティちゃんは……治癒魔法が使えるのか？」

「ぐっ！」

いつもおふざけの国王の顔がマジ。

一瞬みたらし団子が喉に詰まりそうになった。エドヴァルドは、カティが治癒魔法を使えると分かれば大変なことになると言っていた。

絶対口外禁止事項をこの国のトップである国王に知られるわけにはいかない。

（だからとう様のいない時に来たんだ。とう様が王様をタヌキって言っていたのはこういうこと……！ どうしよう。絶対ばれないようにしなきゃ。プリティ・カティ発動！）

「ちゅーまほう？」

カティは何もわからない風を装い、首をかしながら無邪気に王様のおひげをクルクルした。

羞恥心のきわみ。加えて焦燥感とで服の下は汗びっしょり。

「ふうむ。やはり、わからぬか……となれば無意識で助けてくれたのか。そうじゃな、まだこんなに小さいんじゃないあ」

国王はカティの頭を撫でながら、がっかりしたように肩を落とす。

それから独り言をつぶやきながら何かを考えている。

そしてはっと顔を上げると、笑顔になった。

「よし。高い高いをしてやろう」

そう言うなりカティの両脇を両手でつかむと上へ勢いよく持ち上げる。

(ひえー！ 怖い、怖い！)

確実に赤ちゃんの扱いに慣れていない国王にそんなことをされても、いつ手が滑って落とされるのかと怖くて仕方がない。カティが顔を引きつらせると、国王が急に小さく叫び声をあげた。

「うを!? 痛っ!」

国王はよろよろとよろめくと、カティをソファに下ろす。

そのまま自分の腰を押さえてその場にうずくまってしまった。

(ええ？ な、何？ どうしたの!?)

「おうたま?」

「おお、すまんの。腰を……痛めたようじゃ。ああ、痛い」

国王は顔をゆがめながら腰をさすっている。

扉前に控えていた護衛や侍従らが慌ててそばに来ようとしたが、それを国王は視線で押しとどめる。

(ちよっ！ 私そんなに重かった!? ショックなんですけど!)

確かに、ご褒美だ、慰労だなんだとお菓子を食すぎてはいるけれど。ミンミが時々ふんつと気合を入れてボタンを留めているのにも気が付いてはいるけれど！

(あ、そんなことより陛下が大変！ ど、どうしよう)

「ううっ！ 痛たたた!」

国中で一番偉くて尊い国王が。みつともない姿を人目にさらしてはいけない国王が、カティのせいでおかしい格好で唸っている。

勝手に抱きあげられた巻き込まれ加害者とはいえ、罪悪感が少し湧く。

(どうしよう！ 陛下が動けなくなったら大変。異国の国王ももうすぐ来るのに……しかも私の体重のせいなんて恥ずかしくてお嫁にいけないわ！ こはさりげなく陛下の腰をサスサスして……)

カティはおろおろしながらも少しでも治癒魔法を……と国王の背中に触れようとした時、バン！と大きな音とともに勢いよく扉が開いた。

「ち。戻ってきおったか」

カティにしか聞こえないくらいの声でつぶやくと国王はすっと立ち上がった。

(あれ?)

「お、治ったようだ。おお、エドヴァルドは今会議が終わったところか？ ご苦労だったな」

「……あとは任せると会議室を出ていかれて、何か重要なことでもあるのかと思っていました」

まさか宰相執務室にいられているとは。カティに何か?」

エドヴァルドの視線は冷ややかで、とても国王に向けるものではない。

国王は、そんなエドヴァルドの視線を受けてもさらりと笑顔で答えた。

「うむ。最近お前は忙しいからな。カティちゃんが一人で寂しいのではないかと心配で心配で、様子を見に来たのだ。わしに会えて泣いて喜んでおったぞ」

(みたらし団子との再会に涙していただけなんだけど)

国王の豹変に戸惑いつつも、カティはエドヴァルドを見上げる。エドヴァルドはカティと視線を合わせると、ソファアの近くに歩み寄ってきた。

「ありがとうございます。ですが、このようにカティは太——丸く可愛らしくなっておりますのでこれ以上の御厚意は遠慮させていただきます」

そう言って、机に置かれたみたらし団子に視線をやる。

「そうだな。わしもそれは少し心配していたところだ」

(……なんだかとはっきりで貶め^{おとし}られているんですけど)

カティがわなわなしているのをよそに、ぴりついているはずの二人が意気投合している。

「まあ、カティちゃんに変わりはないうでよかった」

うんうんと国王はしたり顔で頷く。

「ええ、この通り元気にしております」

「うむ。安心した。この小さい体からあのような光の帯が出たからな、その後の体調をずっと心配しておった」

ちらりと国王は、エドヴァルドとカティを見る。

敵のアジトをぶっ壊した時や助けを求めた時に、カティは大きな光を空に向かって放った。それを見た国王が疑問に感じるのも無理はない。おまけにあの火事で衣服が焼け焦げていたのに、火傷一つないヴィクトルの状態にも疑惑を持っているようだ。

どう説明するのか、と思っているとエドヴァルドはしれつと答えた。

「何度もご説明しましたが、あの時は女神がヴィクトル殿下をお救いするためにカティを通して力を遣わしたのでしょうか。おかげでカティ自身も助けられました、改めてお礼を申し上げます」

エドヴァルドは胸に手を置いて国王に敬意を表す。

「いや。そうか、そうだな。カティちゃん、またな」

国王はエドヴァルドの威圧の籠もった説明と礼に、ちよっぴり額に汗をかきながら戻っていった。
「油断も隙もありませんね」

扉が閉まると、レオがそう言って苦笑する。

「全くだ」

「陛下の腰は大丈夫だったのかな」

「どうのことだ？」

カティが首をかしげていると、エドヴァルドに何があったか説明を求められた。

「陛下が急に腰痛になつて動けなくなっちゃったの」

「何か企んでいると思っていたが、そういうことか」

エドヴァルドは腕を組んで国王が出ていった扉を見る。カティが首をかしげると、ため息をついてエドヴァルドはソファアに腰かけた。

「陛下はヴィクトル殿下を助けたお前の力をまだ疑っている。痛がるふりをしてお前の魔法を引き出そうとしたのだろうな」

「じゃあ、陛下の腰痛は仮病だったってこと？ 危うく騙されるところだったわ！ 私の体重が重

いのかと申し訳なく思ったけど違ったのね！」

国王のせいで冤罪をかけられた！　そう言うと、エドヴァルドはあつさり首をふる。

「それは否定しない」

推定有罪。やはり鬼畜には乙女心はわからないらしい。ぐっさりと胸に言葉が突き刺さる。

カティが項垂れると、そのピンクがかったライトブラウンの髪を撫で、エドヴァルドは自らの額に手を当てた。

「しかし陛下の詮索にも困ったものだ。今後も魔力暴走を起こしたり、うっかり治癒魔法を発動したりしないように制御する必要がある。魔法の練習を再開した方が良いかもしれぬな」

「やった！」

カティの目が輝く。

書類を書くのも読むのも勘弁してほしいと思っていたところ。ようやく魔法の練習ができる！

「しかしお前には魔力を使いこなせるだけの身体能力が必要だ。それに本当に陛下の腰痛を引き起こすわけにもいかない。まずは体を鍛えるところからだ」

(……陛下許すまじ！)

国王のとぼちりでトレーニングをする羽目になったカティは、世界中を探して米と醤油を輸入してくれないと、もう二度とおひげすりをさせてやらないと心に誓った。

——有言実行の男、エドヴァルドの特訓は即再開となった。

走り込み、筋力トレーニング、バランス訓練などなど。

(面白くないわ。全然面白くないわっ！)

王宮の宰相執務室にて、カティは一生懸命腹筋をしていた。忙しいエドヴァルドに代わってレオが仕事をしながらカティを見守——監視している。

(よし、今ならいける！)

レオがうつむいて書面に何やら書き付けているのを見て、カティはソファアから降りる。そして今度は走り込みをしながら、少しずつ扉の方に近寄っていく。

そしてはつとした。扉のサムクラッチを引き下げ、扉を開けるための棒がなくなっている。

扉の前の挙動不審なカティに気が付いたレオが、すかさず声をかけてきた。

「ああ、あの脱出棒ですが、今は片付けてあります」

「くっ、手回しがいいわね」

部屋から逃亡することは叶わず、再び部屋の中をぐるぐると走ることになったのだった。

そんなことを続けて数日後、ようやくエドヴァルドから魔法の練習のお許しが出た。

カティは屋敷でミルカの訪問を待ちわびていた。

「カティ様、ミルカ先生が来られましたよ。まいりましょうか」

「あい！」

ミンミにはまだ秘密がばれていないから赤ちゃん仕様だ。

カティはミンミと手をつないで玄関に向かう。

「ミルカちえんちえー」

「こんにちは、カティ様。今日からまたよろしくお願いしますね」

「しましゅ」

淑女よろしくスカートをつまみ、カティがぺこりと頭を下げると、見守っているメイドや使用人たちの顔が微笑ましく緩む。

「ちえんちえ。森に行く」

いつもは先に応接室に入り、お茶を飲みながら魔力を流す練習をするが、気が逸っているカティはすぐにも魔法の練習がしたくてミルカにお願いをした。

「わかりました。お天気も良いですし、外でしましうか。では、あとはお任せください」

「よろしくお願いします」

ミンミは頭を下げて二人を見送り、カティとミルカは庭の奥にある森へと向かった。

カティの表情があどけないものから、やる気に満ちたものになる。

「久しぶりですね、魔法の練習をするのは」

あの事件の後、魔術医のミルカがカティを診察してくれた。

使い慣れない、天井を破るほどの力を放ったものの、カティの膨大な魔力に問題はなかった。ただ、突然強大な力を発揮したせいで負荷がかかって、相当疲労していると診断された。そのせいで、今まで練習できなかったのだ。

「エドヴァルド様から、体力面でももう心配はないと聞いていますから、がんばりましょうね」

「はい！ ミルカ先生、空を飛ぶ魔法ってある？」

カティは待ちきれず、何よりも知りたかったことを先に聞いた。

その期待に満ちた瞳を見て、申し訳なさそうにミルカは笑う。

「空を飛ぶ魔法というのは残念ながらありません。そんな便利な魔法があればいいのですが」

「ええ、ないの？ 風魔法を使っても無理？」

「難しいですね。強い風で人を吹き飛ばすことはできますが、自分が自由に飛ぶことはできません」

人の体は重心が定まりにくいように、風を受ける面積が小さい割に重量がある。そのため、姿勢を保ったまま浮かぶのは難しい。相当緻密にコントロールしてもほぼ不可能だという。

「凧とか風呂敷を使っても？」

忍法大凧乗りもそうだが、風呂敷を手足でつかんでムササビのように滑空する忍法ムササビもある。風を操ることができればなんとかかなりそうな気がする——とカティは粘る。

ミルカはふむ、と顎に手をやった。

「どういふものですか？」

カティは、昭和の少年少女のロマンである二つの忍法について説明した。

しかし、ミルカはロマンに胸を打たれることなく、少し遠慮気味に否定した。

「それは現実的ではないかもしれませんが、それに、エドヴァルド様から冒険や危険なことは禁止されているでしょう？」

「いやいやいや。大風部隊とかムササビ部隊とか作れば最強最高のすごい騎士団ができるかもしれないし、きつととう様も感動するに違いないわ」

カティの頭の中に、秘密部隊を率いて裏から国を支配する魔王エドヴァルドの姿が浮かぶ。

「大空から敵を観察したりできるし、見つかったもぴゅーんって逃げられるのよ！」

「……なるほど」

一旦、ミルカはカティの意見を肯定したように頷いた。

「ではその風糸の端は誰が持ってくれるのでしょうか」

「あ……それは……」

「それに大きな風呂敷や風を持って歩くと怪しいですし、準備している間に敵に攻撃されてしまうかもしれませんよ」

「あの……」

「何よりカティ様は高所恐怖症でしたよね」

ミルカは優しく微笑んで完膚なきまでの正論でカティを撃沈させた。空を飛ぶ魔法はなく、忍法も現実的ではないと分かり、カティがしよげたところで森の奥に到着する。

ミルカは、地面に丸まったカティを見てそっと声をかけた。

「そんなに落ち込まないでください。空は飛べないかもしれませんが、カティ様には誰にもない素晴らしい力があるのですから。今使える魔法を強化した方がエドヴァルド様は喜ばれますよ」

「うん！」

非常に残念ではあるが、ないものは仕方がない。まずは魔力をきちんとコントロールできるようにすることが先決だった。

「このあたりまで来れば大丈夫でしょう」

周囲を見渡して誰の視線も届かないことを確認すると、ミルカは両手の平を地面に向けて魔法を放った。地面の土がもこもこ動き、小さな土くれがいくつも出現する。

さらに魔力を注ぎ続けると、その土くれはキノコの形を取り、地面に整列した。

「わあ、ミルカ先生、すごい！」

カティは見事なミルカの魔法にも、土キノコの可愛さにも感動して目を輝かせた。

「では、これまでのおさらいです。このキノコにビームを当ててみてください」

「はい！」

カティはジャジャンと杖を掲げ、頭の中でレーザービームをイメージする。

杖をキノコに向けるとその先から鋭く細い光が放出され、見事キノコを打ち抜いた。

「素晴らしいコントロールです」

土製のキノコを確認すると小さい穴が裏側まで貫通していた。

「ちゃんと威力のあるビームになっていますよ。では、今日は瞬発性を上げていきます」

「はい」

ポインター魔法の時にしっかりと狙いを定める練習をしていたため、静止した的に当てるのはお手の物であった。小さいでも抜群の命中率である。しばらくぶりの魔法でも、そこは衰えていな

かった。

「今度はキノコが無造作に地面から生えますのでそれに当ててください。ただし短時間でキノコは崩れて土に戻りますから、すぐに当てないといけませんよ」

ミルカの声とともに、土のキノコが地面に現れたかと思うとポロポロと崩れて土に戻る。

カティはキノコを視認してから、頭の中でレーザーをイメージして杖を振る――が、その間にキノコは土に戻ってしまう。

「わあ！ もぐらたたきみたい！」

全然うまくできなかったが、まるでゲームのような練習にテンションが上がる。

カティはハンマーでモグラを仕留めるようなイメージで杖を振った。

杖を大きく振りかぶることなく、空中を軽くちょんちょんと叩くように振っていると、次第にタイミングが合ってくる。十分ほどでキノコが土に戻る前に仕留めることができるようになった。

ミルカが感服したように目を見開く。

「少し難しいかと思ったのですが、さすがカティ様ですね。これほどすぐにできるようになるとは思いませんでした」

「えへへ」

ちよつぱり照れたように、しかし嬉しそうにカティは笑った。

ミルカは褒めて伸ばすタイプ。

カティは褒められて調子に乗って力を発揮するタイプ。

二人の師弟は非常に相性が良いのである。

「では今日はこれを最後にしますね」

ミルカがそう言うと、先ほどまでのキノコよりも二回りほど小さいキノコが現れた。

狙うのが難しいほど小さいキノコに対しても、カティはミスすることなく、見事レーザービームで仕留める。

「あっ！」

その時、何かを弾いた音がした。同時にミルカが小さい声をあげる。

カティが見ると、ミルカの頬に赤い筋が一本できていた。

「ミルカ先生！ 血が出てる！」

「大丈夫です、石か何かを弾いたのでしょう」

カティが撃ったレーザービームが小さな土キノコを貫通し、その後ろにあった石を弾き飛ばしてミルカの頬に傷をつけたのだ。

「ごめんなさい！ 早く消毒……」

「カティ様のせいではありませんよ。それにこんなものはすぐに治りますから」

「でも綺麗なミルカ先生の顔に傷が。治療魔法がちゃんと使えたらいいのに。どうしてこんなに役に立たないんだろう……」

顔を曇らせるカティの両手を包んで、ミルカは優しく微笑んだ。

「いいえ、役に立たないわけではありません。カティ様のような特別な力を使うには、必要な時期と

いうものがあるのです。焦る必要はありません」

「ありがとう、先生。でも……一度試してみてもいい？　どう様に内緒にしてね」

そう言うなり、カティはミルカに向かって光魔法を放った。

ミルカが輝く光に包まれる。やがてその光は終息していったが、頬の傷は——消えていなかった。「やっぱり駄目みたい」

カティはがつくりと肩を落とした。ミルカはカティを見て首を横に振る。

「いいえ、痛みはなくなりました。それだけでも相当素晴らしい力なのです。ありがとうございます」

ミルカの驚いた顔を見ると、本当に痛みが消えたのだと分かる。

「そうかな、へへ。よかった」

「素晴らしい魔法のお礼にご褒美です」

ミルカはバスケットから栓で蓋をした瓶とカップを出した。

「それは？」

ミルカが出したのは、茶色のガラス瓶だった。日の光をさえぎるために茶色い瓶を使っていると思われる。

「私の師匠から頂いたもので、異国の珍しい飲み物だそうです。なんでも牛乳を発酵して作った珍しいものだそうですよ」

「わあ」

カティは目を輝かせた。

「カティ様は牛乳がお好きですものね」

ミルカが注いでくれたカップを手に取り、一口、口に含んだ。

口の中に広がるさわやかな酸味とコクのある甘さ——

「こ、これは……カ、カルピス!?　本当に!?　まさかこの世界で出会えるなんて!」

この間のみたらし団子といいカルピスといい、心を揺さぶる懐かしいものが続き、カティの胸をいっぱいにする。カティは知らないが、先日の魔神事件で、それを壊滅に導いたローベンス王国の名は世界に知られることになった。それとともに革新的な教育や福祉、治安のあり方に関しても、各国から注目を浴び、政治的にも商業的にも交流が活発になっているのだ。

しかし、対外的には赤ちゃんであるカティがそんなことを知る由もない。

(もしかして頑張った私に女神様からのご褒美とか?)

カップの中の乳白色の液体を見つめながらカティは考えた。そしてごくごく一気に飲み干した。「ふわ〜、美味しい〜」

涙を落とさんばかりに喜ぶカティのカップに、ミルカが笑いながらお代わりを注いでくれる。

甘酸っぱい香りと懐かしい味。

十分息を吸い込んで香りを楽しみ、今度は一口ずつゆっくりと味わう。

(たまらないわあ)

一滴残らず飲み干そうとカップを傾けると、自然に体が後ろへ反っていく。それとともに樹々の

深い緑やそのはるか高みにある青い空、白い雲が視界に入ってくる。

まるでさわやかなカルピスのようなすがすがしい絵になる景色に、カティはにんまり微笑んだ。
(どう様にお願いでこれだけは絶対に輸入してもら……おうっ!?)

「ぶふおっ！」

大事な大事な最後の一口を、カティは思いきりミルカに向かって噴き出してしまった。

「大丈夫ですか!？」

カティに思い切りカルピスを噴きかけられたにもかかわらず、ミルカは構わずカティを心配してくれた。しかし、カティはミルカの声に反応することができなかった。

カティの視線の先、高い木の上には、カティと同じく目を見開いている人物が立っていたのだ。

(まさか……見られた?)

その人物の顔はすべて見たと物語っていた。

「上に何か？」

カティの様子がおかしいのに気が付いたミルカが木を見上げる。しかし、そこにはもう誰もいなかった。

「な、なんでもないです！ あははは」

乾いた笑いで必死にカティはごまかしたが、内心は大慌てだ。

木の上に立っていたのは黒髪で長身細身の男。

(あれはうちの騎士団長。どう様にばれたら絶対に怒られる！ 不可抗力だけど……団長に口止め

しなくっちゃ！)

自分の身もミルカの身も、団長の身まで危ない。

よく周囲を確認しなかったこと、禁止されている治癒魔法を使った上にそれを見られたこと。

最悪、ミルカはカティの担当から外され、団長はまさかの口封じもあるかもしれない。

もちろんカティは死ぬほど怒られるのだ。

引きつった顔で汗をだらだら流すカティに、ミルカは慌てた。

「やはり調子が悪いのではないですか」

「だ、大丈夫。それよりミルカ先生ごめんなさい！」

ミルカの服に視線を向ける。一級品の生地で作られた、ゆったりとした丈の長い紫の衣装にはつきりと染みが残ってしまっている。

ミルカは「いえいえ」と言うと、首を横に振った。

「こんなものなんでもありませんよ。それより、今の馴染みのない飲み物がよくなかったのかもしれません。もう口にすることがいらないようミンミ殿にもお伝えしておきますね」

「いやいや、これに罪はないですから！」

「なんにしても一旦戻りましょう」

ミルカに抱きあげられて運ばれる。その時、ミルカの肩越しに、カティは団長の姿を見つけた。木の上に再び姿を現してひそかにこちらを見ている彼に、唇に人差し指を当てるジェスチャーを送る。

木の上の団長がこくこくとすごい速さで頷いたのを見て、カティは小さい手の親指をピツと立てた。

（お互いの身の安全のために、お願いね！）

その後、カティは体調を崩して吐いたことになって、強制的にベッドに寝かされた。

異国の飲み物が体に合わなかったのかもしれないとミルカが伝えたことで、飲みたくもない胃腸薬を飲まれ、楽しみにしていた夕食もパンがゆとなってしまう。

そして、残りのカルピスはミルカの手で処分され――、カティは人知れず涙を流したのだった。

○カティの秘密の味方

「本日の訓練は終了、集合！」

ユリ公爵家騎士団の団長クロヴィス・レニエの号令で、騎士団の精鋭たちが一糸乱れぬ動きで集合し、列に並ぶ。

以前にも増して騎士たちの士気は高い。

厳しい訓練に文句も言わずに食らいつき、団員たちの一体感も強まっている。

それもこれも、王宮騎士団に対する対抗心と反発意識のおかげである。

事件が相次いだにもかかわらず、王宮騎士団はカティの誘拐を防げなかった。公爵家の騎士たち

からすれば、もはや信用できない。我らこそがカティお嬢様を守るのだと決意を新たにしている。

騎士団長のクロヴィスは、訓練中の動きが芳しくなかった団員の怪我や体調の確認をすると、それぞれに助言や苦言を送った。それから今夜の夜警巡回の確認、明日の警備担当や配置などの連絡事項を通達する。

そして団員たちから質問がないことを確認すると、解散を告げた。

団員たちは汗を拭いながら、公爵邸の敷地内にある騎士棟に戻っていく。

クロヴィスはそれを見届けると、ひとり屋敷の裏手にある森へと向かった。

広大な公爵邸の敷地は、エドヴァルドが、悪意を持つものが侵入できないように結界を張っているが、警備を万全にするため、クロヴィスは空き時間に屋敷の内外を自分の目で確認して回っているのだ。

それは強盗や魔獣などの侵入だけではなく、最近歩けるようになり、活動範囲が広がってきた公爵邸の天使・カティが万が一迷い込んだ時のために、危ない箇所がないかの点検も含んでいる。

予定していた場所のチェックを終えると、クロヴィスは騎士棟に戻り、シャワーを浴びる。

その後、団員たちからの報告書に目を通し、エドヴァルドに提出する報告書を作成する。それを部下に届けさせた後、ようやく紅茶で一服する――そこまでがクロヴィスのルーティーンであった。

このように、誠心誠意仕事に励む騎士団長は、エドヴァルドからも信頼を得て、重用されている。ほんの少しグリーンがかった黒い瞳に黒髪を持ち、眉目秀麗。

エドヴァルドと変わらないほどの高身長に、鍛え抜かれた細身の体。その造形美は団員たちのみ

ならず女性たちの目も惹きつけるが、本人がトレーニングと公爵家を守ることにしか興味がないために、華やかな生活とは無縁である。

クロヴィスは、エドヴァルドを支えることだけを念頭に置いてこれまでやってきた。

そして、二年ほど前に可愛らしい天使がこの屋敷に舞い降りてからは、守るものが増えた。

カティの存在は、クロヴィスの心に、忠誠心だけではなく強烈な庇護欲と熱い使命感をもたらし、胸の内に至福を与えてくれたのだ。

あの日も何気ない非番の一日となるはずだった、とクロヴィスは紅茶を啜りながら思い出した。

二日前の非番の日、散歩がてら公爵邸の奥の森へと向かった時のことだ。

密に生える木々の間を俊敏な動作で駆け抜け、足場の悪い場所を難なく走り込む。

そしてトレーニングがてら、周囲に異変がないか当たり前のようにチェックしていく。

走り終わると、少し木陰で休んで息を整える。その次には大きな木に勢いよく飛びあがり、枝にぶら下がる。全身の筋肉を使って体を持ち上げ、木に登る。さらに幹をよじ登ったり、枝を掴んだりしながら上へ上へと登っていく。

流石に上までたどり着くと、クロヴィスの顔からは汗が流れ出した。その汗をハンカチで拭き、通り抜ける涼しい風にはてった体を冷やしていると、下方から話し声が聞こえてきた。

下を見ると、カティと魔術医のミルカがこちらに向かってくるところだった。

ミルカとカティ、時にエドヴァルドも加わり、森の奥に入っていく場合、エドヴァルドとミルカ以外の護衛は少し離れたところで待機することになっていた。

クロヴィスはここにいたらまずいと思い、声をかけてその場を去ろうとして目を瞠みはった。

ほんの二歳ほどのはずのカティが、ミルカと普通に会話し、魔法を炸裂させているのだ。

挙句の果てに、ミルカに治癒魔法を使うところまで見てしまった。

この日、ユリ公爵家騎士団の団長クロヴィスは、公爵家の最大の機密事項を知ってしまったのだった。



クロヴィスが思い悩む間、カティは公爵邸の執務室でうろうろソワソワと歩き回っていた。

「団長と何とかお話ししないと」

クロヴィスに見られた直後のカティは、しばらくびくびくしていた。

生真面目な団長がエドヴァルドに見たことを報告すれば、怒られること間違いなしだが、幸いにもエドヴァルドからはまだなんのおとがめもない。時々執務室に来る団長の態度も変わらないため、どうやらなかったことにしてくれたようだった。

（できる男、騎士団長）

——だからこそ、カティにはある作戦があった。

真面目で信用できる上に、身体能力が高い戦いのプロフェッショナル。

カティは並外れたすごい動きができるとはいえ、所詮は小さい体だ。誘拐された時には全く役に

立たなかった。

敵からもエドヴァルドからも逃げる時のためにも、団長から色々と教えてもらいたいのだ。それに、カティのことを知っているのはレオとミルカとヴィクトルだけ。レオとミルカは言わずもがな、エドヴァルド側の人間である。何をしてもすべてエドヴァルドに筒抜け。

ヴィクトルはカティを優先してくれるが、何やらいつも言い知れぬ緊張感が漂っている。だからエドヴァルドに内緒の味方が欲しいと常々思っていた。

そこへとんでもなく優秀な味方候補が現れた。これを見逃す手はない。

（でも公爵家の騎士団長だからとう様に忠誠を誓ってるよね。ここはひとつ賄賂を贈って寝返ってもらって……はっ！ いいこと思いついたわ）

団長との連絡方法を思いついたカティは、手始めに扉の前の護衛騎士に飴ちゃんをあげた。

「いつもたちゆけてくれてありあと！」

直立不動で番をしていた騎士もカティの顔を見てしゃがんでくれる。

「私にくださるのですか？」

「誘拐事件や先日のできごとで、カティ様は騎士の方々にお礼をしたいと思っていらっしやるようです」

後ろに控えていたミンミが補足する。

「当たり前のことでしたですが……、とても嬉しいです、今後も誠心誠意お守りいたします」
護衛はカティに向かって手を胸に当てて、礼を取ってくれる。

「バイバイ」

カティは手を振ると屋敷中を歩き回り、騎士という騎士に飴を配り歩いた。

これで最終目標のクロヴィスに会える！

彼のいる騎士棟には、ミンミに抱っこをしてもらって移動をした。

「これはカティ様、ミンミ殿。どうされましたか？」

カティを見ても特に様子の変わらない、できる男クロヴィスにも飴を渡す。

「だんちよー。ありがと」

「カティ様からお礼の気持ちでございます」

すでにカティが騎士たちへの礼に飴を配っていることは情報として共有されている。クロヴィスがあっさりと飴を受け取ると、カティはにんまりと笑って退室した。

しばらくすると、逆に騎士たちがカティに小さいクッキーや飴などを与えるようになった。

クロヴィスも飴をくれた。

カティは一人になった時に包みを開いて飴を口に入れた。この世界には添加物とか人口甘味料などない。素朴で優しい甘い味が口腔内に広がり、思わず目を閉じる。

（おいしいー。あ。飴を堪能している場合じゃなかったわ）

カティは飴を包んでいた紙のしわを手で伸ばす。

そこには小さい文字で文章が書いてあった。

『我が女神の思召すままに』

（我が女神？ ……何かの暗号かしら？）

カティはお菓子の包み紙で手紙のやり取りを思いついたのだ。実はカティも、クロヴィスに渡した飴にだけメッセージを書いている。

しかし、意味のわからない返信にちよつぱり意思疎通が不安になったカティだった。

それから数日後、クロヴィスとまだゆつくり言葉を交わす機会がない。

カティは一生懸命に絵を描いていた。何枚も何枚も絵を描き、その裏には文章を書いている。久しぶりに執務室にいたエドヴァルドは、そんなカティを怪訝そうに見つめた。

「何を描いている？」

「紙芝居！」

「ああ、子供たちに見せると言っていたあれか」

この世界では特に子供たちの娯楽が少ない。漫画を描きたいところだったが、とんでもなく緻密な作業と根気が必要ですぐにあきらめた。代わりに紙芝居を思い出したのだ。

（好々爺が二人の侍従と世直し旅に出て、貴族の紋章を描いたペンダントを敵に突き付けて『えい、控えおろう。この紋章が目に入らぬか！』と叫ぶのもいいわね。白馬にまたがった暴れん坊の話も捨てがたいわ。童話もあるし、ホラーも推理小説もネタはたつぷりあるわ……）

「おーほつぽほ。作家カティのデビューこうご期待！」

上機嫌で絵を描くカティの横で、すでに描きあげた数枚をバラバラと見ていたレオはトントンと

紙をそろえてテーブルの上にそつと置いた。

「どう？ どう？ おもしろいでしょ」

自信満々で詰め寄るカティにレオがすつと目をそらした。

「そ、そうですね。なかなか味があつて……その、話は非常に素晴らしいと思いますよ。ただ、子供たちにはカティ様の絵……いや、この崇高な芸術がまだ理解できないのではないでしようか」

エドヴァルドもテーブルの上のカティの絵をちらりと見る。そして口元を引きつらせた。

「……レオ、時間だ。行くぞ。カティ、くれぐれも問題を起こさぬようにな」

二人の反応に物申したいことはあるが、この後を考えて素直に返事をする。

「はーい」

エドヴァルドが出ていくと、レオもそそくさと用意をして部屋を後にした。

「ではカティ様、頑張ってくださいね」

一人になったカティは自分の絵をしげしげと眺めた。

「……絵はレオに頼もうかな、うん。しかし、私の名演技は見破られなかったようね」

カティは机の上をさつさと片付け始めた。紙芝居は^{おどろ}図だった。紙芝居の続きを描くと思わせて、実は屋敷に残るのが目的だったのだ。

「失礼します」

ノックとともに入室してきたのは騎士団長のクロヴィス。

カティはこの時を待ちに待っていたのであった。

「団長！ ずっとお話したかったの」

「私もです」

クロヴィスはカティと目の高さが合うように跪いた。その姿に、カティはどきりとする。

「団長。私のこと……気持ち悪いと思わなかった？」

少し不安になってクロヴィスの顔色を窺う。しかしクロヴィスは心外だともいうように目を丸くすると、すぐに優しく目を細めた。

「まさか。カティ様の真のお姿を知る栄誉にあずかり、感極まっております」

クロヴィスはまつすぐな曇りのない目で、カティを見つめた。

「真の姿って？」

「女神エリオーラ様の化身ということです」

「女神の化身!? ただのなんの変哲もない可愛い赤ちゃんですけど？」

思いがけない言葉を耳にしてカティは驚いた。

あの場面でどこをどうしたら女神の化身という話になるのか。

しかし、クロヴィスはまつすぐにカティを見つめて微笑むばかりだ。

「もちろん承知しております。決して口外いたしませんからご安心ください」

「いや、だからそうじゃないって」

「私はエンドヴァルド様に忠誠を誓い、命を預けております。ですが、この心に宿る揺るぎなき信仰は我が女神に捧げます」

カティの小さな手を取ると、クロヴィスはその手の平にそつと唇を寄せる。

「ひいー、だから女神じゃないってば！」

「あなたの御心のままに」

できる男クロヴィスは思い込みが激しく、脳に筋肉が詰まっているタイプだった。

カティは硬直しつつも、咳払いをしてクロヴィスに視線を送った。

「と、ともかく私がこうやって普通に話せること、内緒にしてほしいの。団長が知ったと、とう様にばれたらそりゃあもうどんな恐ろしい目に遭うことか……団長もミルカ先生も。もちろん私も」

カティは身を震わせる。クロヴィスは即座に返事をした。

「承知しております」

その視線は、とてもうつとりしていて、嘘をつきそうには見えない。

カティは、自由に話せることや光を出す魔法が使えることをクロヴィスに打ち明けた。ついでに決して女神の化身などではなく、どこにでもいるか弱い乙女にすぎないことを強く言っておく。

「では、あの助けを求め、居場所を知らせる光の柱は、無意識の魔力の暴走ではなくてカティ様が意図してやったというわけですか」

「そうよ。ぴぴーとね！」

カティは得意げに人差し指を立てて天に向かって右手をあげる。

クロヴィスは目を瞠り、ほう、と息を吐き出した。

「そうでしたか。殿下が火傷していなかったのも、カティ様の御力だったのですね」

クロヴィスもあの焼き払われた森の中での救出劇に参加していたことを思い出し、カティは慌てて横に首を振る。

「あ、あれは女神様がヴィクトル殿下をお助けしたの。たまたまそばにいた私に一時的に力を貸してくださっただけ！」

ポインター魔法のことはいいが、それが治癒魔法と知られるわけにはいかない。ミルカに治癒魔法をかけた場面を見られているけれど、傷は消えなかった以上ごまかせるはず。

クロヴィスはカティの言葉にまた頷いた。

「承知しました。尊き女神様の奇跡は安易に世に知らしめるものではありませんから」

（団長……まさかの話を通じないわ）

「ではその四人の方以外がいる時、カティ様は赤ん坊のふりをしてこられたというわけですね」

「うん。自由にしたいから、お部屋とか執務室とか、安全な場所では一人にしてみらっていたの」
通常カティのような小さな子供には侍女やばあやが常時付いている。クロヴィスはこれまでの状況に納得したようだった。

「カティ様、私もその方々と同様に扱っていただけませんか」

「どうのこと？」

「カティ様付きの護衛に私も入ります。そうすればもう少しカティ様の退屈な時間が減るのではないでしょうか」

「願ったりよ！ でも、そのことを他の人に知られないようにしたいの、どう様にも。私だけの味

方でいてほしいんだけど……」

エドヴァルドの信頼が厚いクロヴィスは、この誘いを断るかもしれない。

そう思いつつ、カティは不安と期待でクロヴィスを見上げる。

返ってきたのは意外な反応だった。

「光栄でございます。我が女神」

クロヴィスは感動したように胸に手を当てた。

「だから違うって……」

カティは、優秀な味方兼、熱烈な信者を獲得した。

クロヴィスがカティの味方になったその夕方、王宮から帰ってきたレオはさっそくあきれたようにカティを見た。その背後からはエドヴァルドの氷の視線も飛んでくる。

「屋敷にいて、どうしてここまで騒ぎになるのですか」

くれぐれも問題を起さぬようにと言われていたにもかかわらず、カティの姿がないとユリ公爵邸は大騒ぎになったのだ。しかしすぐにカティは発見された。森の奥からクロヴィスに肩車されて意気揚々と登場したのだ。ミンミに泣かれたのは言うまでもない。

「森に何をしに行ったのですか？」

カティは、口元に手を当ててこほんと咳払いをした。

「ここから庭を眺めていたら、見たことがない動物が走っていくのが見えたの。とっても可愛かつ

たから探しに出かけて……うっかり穴に落ちて上がれなくなっちゃって。ほんと、団長が見つけてくれなかったら大変なことになるところだったわ」

「ほう？」

すると、執務機の椅子に座っていたエドヴァルドが反応する。

「それはどのような動物だったのだ？」

「え？　ちょ、ちょっと遠かったからはっきりと見えなかった」

「可愛かったのだろう？」

（なんかすごい追及してくるんだけど！　ごまかさなくては）

「そ、そうだけど。何？　どう様も動物に興味あるの？　一緒に探しに行く？　すぐ行く？」

「特段興味はない」

何も読み取れない静かな湖面のようなエドヴァルドの視線に、カティは耐える。

残念……という雰囲気醸し出すと、エドヴァルドが息を吐き出した。

「まあいい。屋敷といえども気をつけろ」

「はい！　すみませんでした！」

（やった！　やり抜いたわ）

カティはほっと胸をなでおろしたのだった。

その日からも、カティは紙芝居を完成させるとの口実のもと、屋敷に残った。

しかし、これらはすべてカティの完璧な計画のとおりに進んでいるのである。

「だんちよー」

カティがとたと走ってクロヴィスの足にしがみつく。

「まあ、またカティ様が騎士団長様に懐いていらっしやいますわ」

両手をあげて抱っこ抱っこせがむカティをクロヴィスが抱きあげると、カティはそのまま団長の肩の上まで登っていく。肩車の状態になったカティを見て、メイドたちが微笑ましそうに笑う。

「カティ様が森で迷子になって泣いているところを騎士団長様が助けたのですって」

「お可哀そうに、ドレスが土で汚れていたもの。怖い目に遭われたのね」

カティはクロヴィスといっても不審がられないように、二人の劇的な出会いを演出したのだ。

今では見慣れた光景だが、初めて肩車姿を見た時、使用人の皆は固まった。

公爵令嬢としていささか品に欠けることや落下の危険性、そしてクロヴィスの職務逸脱や不敬にならないか。しかしカティがクロヴィスに肩車をせがみ、あまりにも楽しそうに笑っている様子を見て、誰も止めることはなかった。

クロヴィス自身が皆から信頼されていたこともあるが、公爵家のみんなはカティに甘いのだ。

（ふふふ、計画通り！）

カティは肩車をしてもらいながらにやりと笑う。肩車は、クロヴィスの耳元に口を寄せて堂々と内緒話ができる最高の体勢なのだ。

「それで前にちょこっと話をした、飛んだり跳ねたりする技のことだけど……その上級編を思い出

したの」

「おお、さすが我が女神。神の叡智を紡がれますか」

「それがね——」

先日、扉のサムクラッチを押し下げる道具を隠されたことにより、カティはこっそりと部屋を抜け出すことができなかった。

モールと呼ばれる、扉に彫つてある溝に足を引っかければなんとかなるのでは。

そう思つて頑張つてみたが、なんともならなかった。しばらく扉と向かい合つてうんうん唸つて

いるうちに、記憶の奥底から何かが浮かび上がってきたのだ。

若い子たちが壁を駆け上がったリ、手すりを使つて一回転しながら移動したりと、軽やかに街中を流れるように進む格好の良いスポーツ。

パルクールだ。

「これだわ！」

パルクールの技術を身につければ、こっそりと部屋を抜け出せるかもしれない。

それにまた危険な目に遭つた時に逃げ切る確率も上がる。

クロヴィスは、トレーニングに木登りを取り入れているくらいだから、絶対にパルクールにも興味を持つだろうし、危険だからと止めることもないだろう。

そう思つて、まずはクロヴィスに話を持ち掛けることにしたのだ。

「——というわけで、団長と一緒に練習したいと思つて」

「どのような技でしょうか」

「どんなと言われたら難しいけど……」

見ているだけでも気持ちいい、あの軽やかな動きを口で説明するのはなかなか難しい。

カティは頭をフル回転させながら、クロヴィスへの耳打ちを続ける。

「街中を縦横無尽に走り回つて、時にはばーんつて飛んで、壁とかにタタツとしてダンツつてしてくるくるつて回つてスザツて着地したりするの。あとは屋根の上を走ったり、飛んだり跳ねたり、とにかくめちゃくちゃかつこいいの」

しかもこの世界には魔法がある。魔法と組み合わせたらさらにすごい技ができるかもしれない。

だが語彙力もないカティの説明は、クロヴィスにはうまく伝わらなかったようだ。

「私の理解が追いつかなくて申し訳ありません」

クロヴィスが申し訳なさそうに謝る。

それを見て、カティはさらにさらに頭を回転させた。

「えーと。空間すべてを使つて立体的に動き回る感じ。例えば勢いを利用して壁を駆けあがつたり、時にはその壁を蹴つてくるつと回転して着地したり。その辺にある物をなんでも利用してすばしっこく軽快に移動するの」

街の中でそこにある物、すなわち階段や手すり、ベンチに壁などを利用し、自分の体を最大限に使つて立体的に移動する。なんでも利用するのが大事なのだと言うと、クロヴィスの目がぴかっと光った。